「こなた・かなた」の観点による解釈と文法（下）

若井勲夫

要旨

話し手自身の意識、感情、立場など主体的な要素を絡めて表現するのは国語の特質であるとともに、日本人の特質である。その中で、動詞による表現を、言語主体が行為や状態を主観的に捉へて表すか、言語主体に関はらないで自然に成立したと客観的に捉へて表すかを区別して考へることが解釈の重要な手懸りになる。本稿では、前者を「こなた」、後者を「かなた」と名づけ、それぞれが単独で、また、両者が関係し合って作用し合ふ意味構造を考察し、解釈するのが主眼である。前稿では、こなた・かなたの観点、こなたからかなたへ、逆に、かなたからこなたへ転換する観点、両者を総合的に表現する観点に分けて、歌文について文法論を基盤に解釈し、古代の表現の発想と根本的な観念を考察した。

本稿はこれに続いて、まづ前稿を発表した後に、いくつか追加すべき内容があり、補遺の形で新しく歌文を取上げ、解釈した。前稿の考へ方の修正はなく、用例とその考察を各項に配置した。これによって、論旨がさらに明確になった。

次に、芭蕉の発句と俳文について、同じ観点に基づき、芭蕉の表現の根源にある発想を究め、その語法と文法を俳諧の構造から明らかにし、表現意識と創作意欲を考察した。主な論点は次の通りである。（1）芭蕉は一つの句であっても推敲を重ね、いろいろ異形がある。その中で自他の動詞による表現的意味を探る。（2）自然の状景を詠む時、その力強さを意識して、また、俳文で改まった気分で書き始める時、こなたの表現になる。（3）自然の力がわが身にはたらきかける時は、かなたからの表現になる。（4）従来、他動詞の自動詞的用法とされてきた句は、こなたとかなたとの関はり、かなたからこなたへの作用と捉へた表現であり、そこに自然の力を感じ取ってゐると解することができる。（5）有名な句で諸説があるものを、こなた・かなたの観点の転換から考察するとよりよく理解することができる。

以上、古典の歌・文章、また、芭蕉の発句・俳文を通じて、国語のこなた・かなたの観点による表現は国語の根底をなし、そこに日本人の考へ方、感じ方の特徴が存してゐることを明らかにし得た。

キーワード：自動詞、他動詞、こなた、かなた、芭蕉

七、前稿の補遺

本誌第四十三号（平成二十三年三月）に拙稿の上篇を執筆した後、いくつか追加すべき内容があった。論旨には変りなく、むしろ補強となる重要なものである。ここに、補遺として掲載する（各項の末尾に、該当する頁・段・行を記す）。

〈三、「こなた」「かなた」の観点〉

○たらちねの母も妻らも朝霧に裳の裾比都知夕霧に衣手奴礼弖（万葉集、三六九一）

○娘子らが春菜摘ますと紅の赤裳の裾の春雨にほひ比豆知弖通ふらむ（同、三九六九）

「潰つ」とは水に濡れ、また、泥で汚れることである。ここは裳の裾が朝霧や春雨に濡れた状態で、濡れるままにといふ意味で、主語・述語の関係を保持して、その状態を見えるまま、事実通りに表した。次の「衣手濡れて」も前稿の通りで、現代語の感覚なら「濡らして」と言ふところだが、古代人は他動的な感覚では捉へなかったのである。（7頁上、17行）

○引馬野にほふ榛原入乱衣にほはせ旅のしるしに（万葉集、五七）

この「入乱」をどう読むかが問題で、「入り乱れ」（全集、集成）の自動詞か、「入り乱り」（大系）の他動詞かといふことである。この訓読は前稿の「風雑、風交」の訓み方と対応してゐて、校注者の見識によるのであらう。既に明らかにしたやうに、古代では入りまじった状態でと、かなたとして捉へて描写するのが一般的な方法である。その状態で衣を染めよといふ方が榛原で乱れ合って、染めやすいであらう。「宮家の使どもの入り乱れてののしり、公事は慰むかたもなきに」（宇津保物語、吹上上）も同じ発想の表現である。ただ、「倉山田麻呂…流る汗、身に沃ひて、乱〻声、手動く」（日本書紀二十四、皇極天皇四年）の「乱〻声」を「声乱れ（て）」（全集、大系）と訓読しながら、「声を乱し」（全集）と訳してゐる。後者なら「声を乱り（て）」と読むべきだらうが、前後がかなたの表現で、また、古代語の状態表現の原則から敢へて返り点を無視して自動詞ふうに訓読したのであらう。

○玉桙の道の遠けば…思ほしき言も可欲波受（万葉集、三九六九）

○御文などはしげうかよへど、まだ御対面はなきを（枕草子、淑景舎、東宮にまゐりたまふほどのことなど）

○御消息ばかりはあはれなるにてたびたびかよふ（源氏物語、賢木）

言葉や手紙の交換を「通はす」でなくて「通ふ」と自動詞で表してゐる。手紙は相手に出すものであるが、それをこなたとしてでなく、かなたとして客観的に往き来すると捉へるのである。これは返歌の場合は、「かへし（うた）」、手紙の返事は「かへりごと」といふことが多いのと対応してゐようか。ただ、第一、二例を現代語に訳さうとすると、「心に思ふことも通ぜず」（全集）、「お手紙などは…交されたが」（大系）と、他動的か受動的に訳すことになる。古代では個別者の行為の表現を控へ、全体的な状態による表現が優勢なのである。

○この草子…よう隠し置きたりと思ひしを、心よりほかにこそ漏り出でにけれ。…端のかたなりし畳さし出でしものは、この草子載りて出でにけり。…やがて（左中将）持ておはして、いと久しくありて

ぞ返りたりし。それより（この草子）ありきそめたるなめり。（枕草子、この草子目に見え心に思ふことを）

これは枕草子の跋文といふべきもので、その成立と流布の事情を記してゐる。ここで、心ならずも世間に漏れ出てしまった、敷物を差し出したところこの草子が載って出てしまった、後になって戻って来たと、すべてこの草子が世に出て、広まったことをかなたとして、ひとごとのやうに捉へてゐる。自分の意志とは全く無関係に、まるで草子自身の勝手な行動のやうに表す。末尾の「なめり」で曖昧に婉曲に推量してゐることと合ってゐる。自分がこなたからことさら世に発表したのではない、自然に流れて行ったといふわけである。これは跋文によく見られる謙遜の言葉といふより、このかなたとしての状態的な発想が古代の日本人の発想方法であり、即ち、表現方法であったのである。（以上、9頁上、7行）

〈四、「こなた」から「かなた」へ〉

○見わたせば柳桜をこきまぜて都ぞ春の錦なりける（古今集、五六）

「こきまぜ」とはちぎり取って混ぜ合せる、取り合せることである。これを諸注は「とりまぜて」（集成）と他動詞に、また、「混じり合って」（新大系）と自動詞に訳してゐる。本来は他動詞であるのになぜ二様の解釈が成り立つのか、こなた、かなた論で説明する。「こきまぜ」た主体は直接には「都の春」であらうが、作者が自ら「こきまぜ」た気分で眺めてゐるかもしれない。しかし、それ以上に春そのものに内在する生命の力が柳と桜をうまく配合したやうに見たのである。自然の力、つまり全体者が「こきまぜ」て美しく織り成してゐる。これはこなたの発動であり、それが実現したさまは、かなたとして都こそ秋の錦ならぬ春の錦だった。それは全体者たる自然のはからひであるので、こなたの動作は隠れて消え、かなたの状態として捉へることができるのである。（13頁上、10行）

〈五、「かなた」から「こなた」へ〉

○修行者あひたり。…京にその人のもとにとて、文かきてつく。するがなるうつの山べのうつつにも夢にも人のあはぬなりけり（塗籠本伊勢物語、九）

伊勢物語の天福本系や新古今集（九〇四）には「人にあはぬ」となってゐるが、塗籠本にのみ「人のあはぬ」とあるのは注意すべきである。藤井高尚の『伊勢物語新釋』（文化十年）に『人のあはぬ』といふこと、ききなれぬやうなりと思ふ、後の世意のさかしらに、うつす人のかきなしたるにやあらん。いみじきひがごと也」と、後世の誤写と推定してゐる。塗籠本は「古形」（玉上琢彌）で、「他本より古態を保っていると思われる本文もあって注目される」（日本古典文学大辞典）もので、「人の」が正しい本文である。主客の捉へ方として、誰かの夢を見ると、その人が自分（こちら）を思って夢に現れたと判断する当時の習慣に基づいて、その人が主体になってゐることと同じく、この場合も主格の「の」が適切である。現実にも夢の中にも人が来合せない、姿を現さないことで、「あなたが姿を見せて下さらぬことですね」（全書）と受益態に訳すのが一方法である。しかもその前の「修行者あひたり」とこの表現が対応してゐて、かなたからやって来て、こなたに合せるといふ共通の意味を響かせてゐる。

○常しへに君も阿閉掫毛いさな取り海の浜藻の寄る時々を（日本書紀十三、允恭天皇十一年）

○後つひに妹は将相と朝霧の命は生けり恋は繁けど（万葉集、三〇四〇）

相手があふといふ表現は早く上代にしばしば見られる。どちらも、あなたは私に逢って下さるでせうかと、やはり受益態で解するのが現代語の感覚として自然であらう。第一例を意訳すれば「あなたはいつもお出でになるわけではございますまい」（大系、古代歌謡集）と、姿を見せることが来ることにまで解釈の幅が広くなり、かなたからこなたへの作用がやや弱くなった。相手が主体になると、どうしてもこちらは受身的、消極的に会ってくれるといふ態度になる。

○言霊の八十の衢に夕占問ふ占正に告る妹相依（妹は相寄らむ）（同、二五〇六）、

○玉桙の道行き占の占正に妹逢（妹は逢はむ）と我に告りつる（同、二五〇七）

相寄ると逢ふが並んで、同じ構造の意味で表されてゐる。摩き寄るだらうと逢ふだらうが同じ発想と感覚で使はれ、かなたからこなたへ近づき、寄り、逢ってくれるのである。

さて、万葉集のこの用法について、伊藤博は次のやうに解説する（『萬葉集釋注』四、五）。「人逢ふ」は「人に逢ふ」に対して、「相手が逢う意志を持って、こちらに逢ってくれることを示す」、「相手を主体と」し、「逢う意志を相手に托した表現」である。ここで相手に意志があるかどうかは伊勢物語の例にあるやうに、さうでないこともある。また、この出会ひには「特殊性、神秘性」があり、「自らの意思を超越した突然の出会いを願望」したり、「相手がひょっこり神秘的に立ち現れて自分と出会ってほしい気持ちを表す」とする。また、「万一の偶然に対するはかない期待」や「その偶然の表現される状況を幻想する神秘性」があるとも述べる。確かにこのやうに読み取ることができるが、それは前後の文脈や場面によるのであり、鑑賞的な立場から言へることである。「あふ」そのものに右の意義が含まれてゐるのではなく、前述の通り、「人の逢ふ」は人の寄る、人の来ると同じ文構造で、そのやうにしてこちらに会はせたといふのが原義である。また、あふことはあらかじめ約束して落会ふのは別にして、もともと偶然性があるもので、ことさらここで強調するほどのものではない。「人の逢ふ」はやはりかなたの世界からこなたの側への力の作用として受止めるといふ捉へ方が根本で、それは来合せる、逢ってくれる（下さる）、姿を現す、現れると、相手を主体にした発想なのである。

○にげなきもの…月のあかきに、屋形なき車のあひたる（枕草子、にげなきもの）

○散り散らず聞かまほしきをふる里の花見て帰る人も逢はなん（拾遺集、巻一）

○常盤井の相国…勅書を持ちたる北面逢ひたてまつりて、馬より下りたるを（徒然草、九四）

第一例は屋形のない牛車が「行き合せた時」（新大系）と、かなたから受止めるのがよい。「予期せずやって来た」（大系）はその通りであらうが、「やって来た」が一般的な言ひ方なので、強ひて言へば「予

期せず出くはした」とまで解すべきである。第二例の「故里の花を見て帰ってくる人があれば、逢ってほしいものだ」（新大系、拾遺集）は熟さない解釈で、このやうな国語の表現があるだらうか。「故里の花を見ての帰りという人に会えるといいのに」（同、平安私家集、伊勢集）は、格を取り違へ、しかも「なん」の助詞と意味が合ってゐない。これについては既に本居宣長が「人もと云も、人のあはなむなり」と述べてゐる（古事記伝、十六）。人が来合せてほしいと簡潔に解すればよい。これほど現代人には縁遠い発想と語法になってしまったのである。第三例の「たてまつり」は受手の相国に対する敬意で、これと「逢ひ」が絡まって訳しにくい。北面の者が「行会い申し上げて」（橘純一、新講）、「たまたまお会い申上げて」（松尾聡、全釈）が行き届いてゐる。しかし、「お逢い申上げて」（新大系）、「お会い申して」（全集）では現代語の「逢ふ」と同じで、古語の「逢ふ」の意味構造を理解してゐないことになる。（以上、18頁上、14行）

○明くるまで試みむとしつれど、とみなる召使の、来あひたりつればなむ（かげろふ日記、天暦九年）

○人々また来あへばやがてすべり入りて、その夜さり、まかでにしかば（更級日記、春秋のさだめ）

○左大将朝光、久しくおとづれ侍らで、旅なるところに来あひて（新古今集、一二〇九、詞書）

中古に、来合せる、来て会ふといふ意味の「来あふ」がしばしば用ゐられた。これは前の「あふ」と基本的に同じだが、やって来てといふ意味が含まれてゐる。「あふ」単独ではどうしても「～にあふ」とりやすく、より正確に「来」を合せた複合語が成立したのであらうか。三例とも突然、偶然に来てあふ、出くはす意味だが、これは前の万葉集と同じく場面によるものである。ここはやはりかなたからの出来事と捉へてゐると解するのが基本である。

○宇津の山越ゆるほどにしも、阿闍梨の見知りたる山伏、行きあひたり（十六夜日記）

伊勢物語第九段の「修行者あひたり」を念頭に置いた叙述である。しかるに「山伏に行き逢った」（新大系）、「修行者と私とが、あった」（全集）と解するのはどういふ了見であらうか。ここの中心者は誰か、主格をどう考へるかである。山伏が主体であることはこの文構造からも分る。「向こうからやって来た」（学術文庫）がかなたからの動向を捉へて適切だが、出くはしたとまで訳出すべきである。

○くちをしきもの…さるべき人の、馬にても車にても行きあひ、見ずなりぬる（枕草子、くちをしきもの）

「行きあふ」は分りやすく、現代語の感覚に近いと思はれる。それでも基本的には「人の行き合ふ」であり、向うから行きあはせるのであり、簡単に言へば「出て来た」（大系）といふことになる。

○忘るなよほどは雲居になりぬとも空行く月のめぐりあふまで（拾遺集、巻八。伊勢物語、十一）

月がめぐりあふやうに、二人が再びめぐりあふまでとを掛けてゐる。「月のめぐりあふ」の「の」に注意すると、月にめぐりあふではなく、月がめぐりめぐって再び「あふ」、つまり、出くはす、姿を現すやうにの意味で、「あふ」の原義を保って解釈する必要がある。現

代語でも、めぐりあはせ、まはりあはせ、しあはせ、など他動詞的に運命を判断してゐて、発想は変ってゐない。

○待ちけりな昔も越えし宮路山同じ時雨のめぐりあふ世を（十六夜日記）

「時雨にめぐりあふ」と表す方が我々にはよほど分りやすいが、古くはさうは考へなかった。昔と同じ時雨がめぐって作者に降りかかって逢ふことになるのである。時雨が主であり、かなたの空からこなたの作者に降る、つまり、時雨が私をめぐりあはせるのである。「私と再会するまで」（新大系）、「めぐり逢う運命を」（全集）はよく考へられてゐるが、あと一つ足りないものがある。それはめぐりあひを他に任せ、それをそのまま受止めるといふ心意を把んでゐないためである。

○日並の皇子の尊の馬並めてみ狩り立たしし時は来向（万葉集、四九）

日並皇子（草壁皇子）が亡くなられた後、遺児の軽皇子（後の文武天皇）が追慕の狩に出られた時にお供をした柿本人麻呂の鎮魂歌である。安騎野に旅寝した明け方、その同じ時刻が到来した。この「来向ふ」はただやって来るといふ単純なものではない。向うからこちらに、つまりあなたからこなたにやって来る、近づいて来るといふ、一行の張り詰めた、集中した覚悟の心境を表してゐる。「来て我と面と向う」（集成）といふ解釈が正確で、あなたからの強く重い力を正面から受止めようとする気概に漲ってゐる。既述の一連の「あふ」も同じ精神構造から解すべきものである。（以上、18頁上、20行）

○東人の荷前の箱の荷の緒にも妹は情尓乗尓けるかも（万葉集、一〇〇）

ももしきの大宮人は多かれど情尓乗而思ほゆる妹（同、六九一）

相手のことが自分の心に乗る、「おおいかぶさること」（全集）で、自分自身が思ひ浮べるのではなく、相手を主にした捉へ方である。これが古代人の独自の発想法であることは既述した。夢は相手がこちらを思ってゐるからこちらに現れるといふ観念である。

○秋霧の立野の駒をひく時は心に乗りて君ぞ恋しき（後撰集、巻七）

これも同じくかなたから恋人のことが心に乗って入ってきて、離れない、受動的、消極的な状態である。古代の「恋ふ」は「人を恋ふ」ではなく、「人に恋ふ」と言ひ、眼の前にゐない相手に逢ひたいと思ふ態度であることと根底において共通する捉へ方であらう。

○韓人の衣染むといふ紫の情尓乗而思ほゆるかも（万葉集、五六九）

○何故か思はずあらむ紐の緒の心尓入而恋ひしきものを（同、二九七七）

心に染み入り、染み込む、心に入って来て、入り込むと、これも同じく恋人のことが心に占めてくることで、現代語の、心に染みる（懸る、浮ぶ、適ふ、残る、染まない）といった表現に引継がれてゐる。（以上、18頁下、7行）

〈六、「こなた」「かなた」の総合的表現〉

○紫のにほへる妹乎尓苦久有者人妻ゆゑに我恋ひめやも（万葉集、二一）

「妹を憎くあらば」は、あなたを気に入らないと思ってゐるならば、

あなたが気に入らないのであるならば、と二様の解釈ができる。前者は「を…思ってゐる」とこなたによる意味、後者は「が…ある」とかなたによる意味である。「を」に上接する「妹」は目的語なのか、主語なのか。前稿で考察したやうに、「志を見え」「梶を絶え」「名を立ち」は一方では「を…させる」と使役的な意味を持つと同時に、他方では「が…（ら）れる」と受動的な意味が含まれる。「妹を憎くあらば」もこれと同じ意味構造で、他動的、自動的な状態を同時的に表してゐる。

これを現代語で考へると、「古里が恋しい」は古里を恋しく思ふ、古里が恋しい状態であると両様に解される。「音が聞える」は音を聞くことができる、音が聞える状態にあるといふことである。この用法について、時枝文法では、古里や音は恋しい、聞えるといふ述語の対象を表し、目的語にあるものが一転して主格に立つとして、このやうな「感情を触発する機縁となり、或は感情の志向対象となるもの」（日本文法文語篇）を、対象語と名づけた。「水が欲しい」は水を欲するといふ主観的な感情とともに、水が欲しい状態にあるといふ客観的な性質、状態を表す。こなたの情意表現を内面、裏とするなら、かなたとして捉へる表現は外面、表といへ、一語にして複合した表現になってゐる。時枝誠記はこのことを「国語の総合的な把握」による「主観、客観の総合表現」（国語学原論）とした。本稿の立場ではこなた、かなたの総合的表現と言ひ表すことができる。そして、この表現は動詞、形容詞また、いはゆる形容動詞（あなたが好きだ）にも及ぶのである。ただ「対象語の問題は、述語に用ゐられる用言の意味に関係することで」あり（日本文法口語篇）、対象語に関はる用言は限られた範囲内である。これはまた、先に述べた「志を見え」「名を立ち」の類の動詞にも言へることである。

なほ、対象語は対象に対するこなたの情意が、こなたを消して、その対象そのものがかなたとして主格に立って、状態を示すことになる。そのため、常に「私（に）は（…と思はれる）」と補ふことができる。「語学ができる」も「私は…」「私には、彼が…と思はれる」と、主語は他者でも成立する。そのため主体的な感情が伴って、かなたとして捉へてもやはり主観、客観の総合的表現である。さらにまた、このことは右の「志を見え」「名を立ち」にも当てはまることであり、「私は、私にとって」と、表面には出ないけれども主体的なわがこととして、こなたに関はる意識もつきまとふことになる。これを国語が言語主体の意識や感情など、主体的な要素が豊かである（渡辺実『日本語概説』）ことと結びつけることができるのである。（25頁下、24行）

八、芭蕉の発句と俳文の解釈

以上の「こなた・かなた」の観点を芭蕉の発句と俳文に適用し、改めて読み直して、その表現の根底にある発想と感覚を究め、その語法と文法を俳諧の構造から考察する。さうして、芭蕉の表現意識と創作意欲に立ち返り、従来、論議のあった発句についても一定の解釈に導くことができよう。

（一）「こなた」か「かなた」か

（1）発句

○嶋々や千々にくだきて夏の海（蕉翁全伝附録）

○嶋々や千々にくだけて夏の海（蕉翁文集）

松島湾の島々がさまざまな形をして美しく点在してゐる。前句はこなたからの捉へ方で、「くだきて」の主体は何か。松島の自然を司どる大いなるもの、つまり造化の神の主体的なはたらきによる。大自然の力が島々を細かく砕いたかのやうに配置した。一方、後句は島々が点々と夏の海に広がっている静かな状景で、かなたとして客観的に捉へて描写してゐる。

○白露もこぼさぬ萩のうねりかな（芭蕉庵小文庫）

○白露もこぼれぬ萩のうねりかな（栞集）

白露を置いた萩の枝がその重みでしなってゐる。前句は美しい白露を一滴もこぼさないやうに健気に耐へてゐる萩をこなたとして受止め、その萩の意志による表現とした。萩は生き、活力に溢れてゐる。一方、後句は萩の感情には踏み込まず、かなたの風景として淡々と感情を込めずに描く。こなたの表現は対象を擬人的に捉へて、その動きを見ようとする。そこに情意がはたらき、「白露も」の「も」に響いてくる。

○五月雨や色紙へぎたる壁の跡（嵯峨日記）

○五月雨や色紙まくれし壁の跡（笈日記）

「明日は落柿舎を出でんと名残をしかりければ、奥口の一間〳〵を見廻りて」と前書がある。前句はいつのことなのか、色紙を剥いだ跡が壁に残ってゐる。実際は自然に剥がれたかもしれないが、そこに主人の意志を汲み取って、こなたとして捉へた。そこには去りゆく作者の惜別の情も含まれ、折からの五月雨の降り続く情景とぴったりである。後句はいつの間にか自然に捲れたのであり、かなたとして客観的な様子である。

○語られぬ湯殿にぬらす袂かな（おくのほそ道）

○語られぬ湯殿にぬるる袂かな（花摘）

○汐越（しほごし）や鶴はぎぬれて海涼し（おくのほそ道）

出羽三山の一つ、湯殿山の神秘は他言無用とされてゐる。それだけに参拝を果した感慨は深い。その涙は自然に出るものであるが、第一句は自らの動作としてこなたと捉へ、第二句は自らに関はることなく、かなたとして他人事のやうである。第三句は現代の感覚では「ぬらし」とあるところだが、古くは「ぬれて」、つまり濡れた状態で（まで）、海が涼し気である、といふ発想をしたことは前稿で述べた。これに対して、第一句のこなたによる表現の主体的な力を読み取るべきである。

○宿かりて名を名乗らする時雨かな（続猿蓑）

宿かして名を名乗らする時雨かな（泊船集）

東海道の島田宿で、時雨が急に降って来たので、川庄屋に泊ることになり、その主人への挨拶句である。前句で「宿かりて」の主体は構造から言へば作者であるが、初・中句全体が下五に係ると見るべきで、「時雨」が、作者が宿を借りるやうにさせ、つまり宿を借らせ、互ひに名前を名乗り合せたと解釈する。句の主体は時雨であり、時雨

の、かなたからこなたへの力強い作用が二人を結びつける「縁、仲介」（全集）になったと洒落れた。後句は初五もかなたからの方向と捉へ、中七ともに時雨を主格とする単純な構造に仕立てた。「時雨のあわただしく降る侘しい本情をい」ひ、両句の「句意にかわりはない」（大系）とする説もあるが、後句はかなたが主体であることから、自然の計らひによる出会ひの喜びを趣意とすべきである。「宿泊は予定通りの行動ながら、時雨を主体とすることで、旅における風流な出会いのありがたさが印象づけられる」（芭蕉全句集）といふ解釈が正鵠を得てゐる。

○年は人にとらせていつも若夷（わかえびす）（千宜理記）

○年や人にとられていつも若夷（詞林金玉集）

　正月に売り歩く恵比寿の像を刷ったお札の像はいつも若い福相であるが、あれは毎年、人に年を取らせるばかりで、自分は少しも変らず若いといふことである。前句は若夷の強い意志を汲み取って、積極的にこなたの自分の方に誘導しようとするおもしろみがある。一方、後句は人に年が取られると、主体の立場はなく、かなた側として扱ふ消極的な弱さがある。加賀千代の有名な句に「朝顔に釣瓶とられてもらひ水」（千代尼句集）がある。この句について「いかにもその風雅な思ひやりが優しく感ぜられる。…しかし…風雅の何たるかを理智的に説明したやうな浅いところにとどまってゐる」（頴原退蔵『俳句評釋』）といふ説がある。確かにさういふ面はあるが、「とられて」が「とらせて」であればどうであらうか。朝顔に対するやさしい思ひやりはかなたとして捉へた受動的な表現にこそふさはしい。仕方なくその状態のままにしておいたといふ、ごく自然な接し方である。後者であれば、こなたからの姿勢が強く出過ぎて、思ひやりの押しつけ、悔しさがにじみ出て、よくない。従って、ここは「わざとらしい臭味」とまで考へずに、「れ」は迷惑の受身であり、素直に解釈する方がよい。

○この秋は何で年寄る雲に鳥（笈日記）

○けふばかり人も年寄れ初時雨（韻塞）

　この「年寄る」に対する「年寄す」といふ言ひ方はないが、この語句の発想と表現は日本人にとって重要と思はれるので、ここに考察する。前句は「旅懐」と題する句で、このころ（元禄七年）作者の健康はすぐれず、身の衰へを感じてゐた。どうしてこんなに年が寄って来たのかと、身心の疲労を覚えて、不安な思ひにとらはれてゐる。ここで、現代語なら「年を取る」と言ひ、現に、前項で「年は人にとらせて」と表現してゐる。この句でことさら「年が寄る」と表してゐることに注意しよう。「取る」はこなたの表現、「寄る」はかなたの表現である。次に、後句は「元禄壬申（五年）…許六亭興行」と題し、折からの初時雨に、「年老いた、しみじみとした心境になって、初時雨のものさびしい情趣を味わってもらいたい」（全集）といふ趣である。これも現代の感覚なら「年取れ」で、しかも「人も」といふ主格でなく、「人にも年が寄れ」と与格に解したくなるであらう。

　このやうな発想の根源は何か。年齢についての考へ方が変化したのであらうか。「年が寄る」とは、年があちらから、遠い死の世界から、こちらに、自分の方に近づいて来る、わが身に寄せて来るといふ捉へ方である。年はかなたからの作用、力のはたらきであり、年が重なり、

積もる状態になる。一方、「年を取る」は、こなたからの動きであり、行動である。前者は、年齢はこちらから取り重ねていくものでなく、勝手に寄って来る、人知の及ばぬ一つの定めとして近づき、重なっていくと考へたのである。

ある上人が「腰屈まり、眉白」い「有様」で参内したのを「あな尊（たふと）の気色や」と讃嘆されたのに対して、「資朝卿、これを見て、『年の寄りたるにさふらふ』と申されけり」といふ話がある（徒然草、一五二）。ここは年を取ると解するのが一般的だが、さういふ自らの行動的なものでなく、年齢が経ち、重なり、積もるといふ自然で生理的な現象を「年が寄ってゐるだけでございます」と、状態的に言ってゐると解釈すべきである。

「波寄る」に対して「年寄る」がある。しかし、「波寄す」に対して、「年寄す」はない。「年寄る」はかなたのもの、ひとごととして捉へるやうに、自然の定められた運命である。もし「年寄す」の語があるなら、それはかなたからこなたへ強く迫って来る、わがことと捉へたことにならう。年なみはもともと年並、年次で毎年、年ごとの意味である。それが、年が寄ることを波が寄ることに連想し、さらに波が押し寄せて来るほどの力を感じ取り、年波の漢字を宛てた。「年波はわが袖よりぞ越えて行く残る憂き身の末の松山」（拾玉集、巻七）は、「年寄す」の域に達してゐる。この感覚は現代語の「寄る年波」「迫り来る老い」の表現に繋ってゐよう。

さて、「寄る」とは「ある所・ある線に向って、多くのものが次々に移動して来る。その結果として、その所に集積を生じることもあ」り、「年寄る、皺が寄るという句は、波の集積に発想が通じている」（角川古語大辞典）。古代語で、年来経（きふ）（行く、変る、ねぶ、長（た）く）、また、年高し（深し）などと、年寄るは同じ語構成によってゐる。この語意識は「死期（しご）はつひでを待たず、死は前よりしも来らず、兼ねて後ろに迫る」（徒然草、一五五）といふ死生観に関はってゐよう。「年を取る」といふ表現が表れ出したのは中世の狂言からで、近世に徐々に増え、現代に定着した。年寄るが体言になると年寄りであるが、年を取るに対して、年取りといふ語がないことも、後者が新しい語であることを示してゐる。芭蕉は前項の句では滑稽なおもしろみから「年はとらせて」と言ったが、ここでは古格を守り、わが身に寄る年波を自覚したのである。

次に、後句の「人も年寄れ」は若い人にも年老いた状態になって、翁さびてといふ、作為を排した自然の心境になるやうに勧めてゐる。これは「年を取る」といふ、こなたからの行動ではふさはしくない。かなたからの老いの波を素直に受止めるかのごとき情態になるやうに言ってゐるのである。蕪村の句「木曽路行きていざ年寄らん秋独り」（句集）は「故人に別る」と題し、芭蕉を追慕した句である。「年寄らん」は本来、自動詞である語に「ん」といふ意志の助動詞で自分の認識を示してゐる。年を取らう、重ねようではやや落着きを欠く。「老いの心境に味到し」（全集）、「老境に入って」（新大系）と、かなたから来る老いの状態を主にした解釈にならざるを得ない。芭蕉の句も、年が重なっていく、年が重なり老人らしい心になれと、基本的に解釈すべきである。ちなみに、古今集の「桜花散りかひくもれ老いらくの

来むといふなる道まがふがに」（三四九）「老いらくの来むと知りせば門さしてなしとこたへてあはざらましを」（八九五）も「老いらく」、老いといふものがかなたからやって来ると擬人化して捉へてゐる。これと対応するのが「老いを迎ふる者は、日々旅にして」（おくのほそ道、発端）の「老いを迎ふ」である。これは年寄ると同じ発想の仕方であり、日本人の生命観の根底にあるものであった。ちなみに、森田康之助は「将来の内にひそむ価値が現在を、そして過去を、自らの方に呼び込んでゐるのである。将来が…降りて来るのである。齢をかさねて老年となるといふのではなくして、老齢が一歩一歩と我々に近づいてきてゐる」と、哲学的に考究してゐる（日本思想の構造）ことは、まさに「年が寄る」の根底にある思想である。

(2) 俳文

○舟の上に生涯をうかべ、馬の口をとらへて老いを迎ふるものは（おくのほそ道、発端）

どちらもこなたからの表現で、対句をなしてゐる。前述の通り、年は寄り来たるものであり、それを受取る立場からは迎へることになる。年を取るとはやはり違った捉へ方である。

○片雲の風にさそはれて、漂泊のおもひやまず、海浜にさすらへて（同）

この「さすらふ」は四段、下二段活用ともに自動詞で、意味もさまよふ、放浪するで、同じとされる。確かにその通りであるが、これでは活用の特性が出て来ない。その前に「漂泊」と言ひ、同じ意味の語を重ねることがあるだらうか。「いかなる心地してさすらへずらむと思ふに」（かげろふ日記、天禄元年）「京のうちにてさすらへむは例のこと」（更級日記、父の任官）などから考へると、単にさまよひ歩くのではなく、苦しく生活する、生きるといふ広い意味で使はれてゐる。「さすらへ」は下二段活用のェ母音の使役性の語感から、「（わが身を）さすらへ」と他動的な意志の力が感じられる。「片雲の風にさそはれて」はかなたのことで、誘はれた状態のままに、さうしてこなたからかなたへの作用として、身を（人生を）さすらへさせるといふ気息を読み取るべきではないか。わが身を海浜にさまよふままに任せ、流浪するままに従って、といった含みで解するのがよい。この点、四段活用が「さまよい歩くの意で動作性」、下二段活用が「さすらっているの意で状態性」を「表すか」と説く（新選古語辞典）のは一つの方向を示してゐる。

○そぞろがみの物につきて、こころをくるはせ…松嶋の月、先づ心にかかりて（同、松島）

○前途三千里の思ひ胸にふさがりて（同、旅立ち）

「そぞろがみ」「松嶋の月」「前途三千里の思ひ」が、かなたから作者の心に迫って来る。それは抗しがたいほどで、作者はそのまま受止めるしかない。そのどうしやうもない思ひはこなたとして、例へば「心にかけ」「胸にふさぎ」とは表すことができない。ここは意志を越えた自然のはたらきを言ってゐる。

○痩骨の肩にかかれる物、まづ苦しむ（同、草加）

この「苦しむ」の主体は何か。「前後の動詞の主語はいずれも『予』であるから、荷物に自分が苦しむ」（全集）と解するのが通説である。

しかし、今まで見て来たやうに、主語をかなた側で表して、変化をつけてゐること、「肩にかかれる物」の重さをかなたからこなたへのものとして全身で受止めるのは冒頭からの発想にあることから、苦しめると他動的な表現と解するのがよい、この後に、「紙子一衣…路頭の煩ひとなれるこそわりなけれ」と、やはりかなたとして、道中の苦労を述懐してゐる。これらは主語が何かといふ問題でなく、旅立ちに当っての作者の不安な心境から、苦労の種になるものを主に捉へて、自分の心身に振りかかる重みと苦しみを表してゐるのである。

○心もとなき日数重なるままに、白河の関にかかりて、旅心定まりぬ。

（同、白河の関）

やはりかなたとして描く。自己の計らひは捨て、自然に任せ、運行のままに旅を続けてゐるのであらう。ここが陸奥への入口であり、作者自身、旅人らしい心境に達し、落着いてきたのである。

○これ、庄司が旧館なり。麓に大手の跡など…涙を落とし…一家の石碑を残す。中にも、ふたりの嫁がしるし…袂をぬらしぬ。…茶を乞へば、ここに義経の太刀、弁慶が笈をとどめて什物とす。

笈も太刀も五月に飾れ紙幟（同、飯塚）

義経に従って戦死した佐藤継信・忠信兄弟の遺蹟を訪れて、作者の感慨は頂点に達した。それはこなたによる表現を次々と重ねていく文体によく表れてゐる。自分の行動だけでなく、寺の処置を全体者に位置づけて、主観的、主情的に思ひ入れを十分に込めて、対象に没入する。筆は抑へ気味であるが、深い悲しみを堪へてゐる。そのことは発句で、「五月に飾れ」と命令形を用ゐてゐることからも理解できる。これは命令といふより希望であり、寺（全体者）に問ひ掛けながら、自分自身の内面にも問ひ、自らもそのやうにしようと言ひ聞かせてゐるのである。

（二）「こなた」から「かなた」へ

（1）自然現象との関はり

①発句

○五月雨を集めて早し最上川（おくのほそ道）

この句の眼目は「集めて」にある。普通の感覚なら「五月雨の集まり」であらう。これはかなたの表現で、作者と関はることのない、ひとごとの世界である。しかし、「五月雨を集めて」とすることにより、句の姿が生彩を放つ。五月雨を集めるのは最上川そのものである。雄大で力強い川のはたらきが梅雨の雨量を一点に集めるかのようである。「早し」の主体もやはり川であり、この句全体が最上川の迫力を満たせてゐる。初案は「五月雨を集めてすずし最上川」（真蹟懐紙）であったが、「すずし」と感じるのは作者であり句の勢ひが寸断される。もとより最上川に雨が降り注いでゐるのであるが、その自然現象をあたかも最上川が引きつけて集めたかのやうに捉へて表現する。客観的な現象、事態を、視点を移して、それを受入れる自然のはたらき、意欲として捉へたのである。かなたの実現を表すのにこなたの力、意志作用として、主体が捉へて表現する。

○暑き日を海に入れたり最上川（同）

「暑き日」は、暑い太陽、暑い一日、また両方を兼ねると諸説あるが、

いづれにしても、この句の中心は「入れたり」である。前句と同じく、海に入れるのは最上川である。それほどの大きな川の力を表すのに「入りたり」といふ自動的表現では足らず、「入れたり」といふ他動的表現で表すしかない。単にかなたの世界に止ることなく、こなたからの力の作用がかなたに及んでいくのである。一種の擬人的表現であるが、川をまるで人と同じほどの意志を持つと把んでゐる。これと相似た発想の歌は「あかなくにまだきも月の隠るるか山の端逃げて入れずもあらなむ」（古今集、八八四。伊勢物語、八十二）である。山の端に対して月を入れないでほしいと望んでゐる。これは知的な諧謔が主で、単なる擬人法で済むが、発句の場合はそれ以上に大自然の迫力ある意志力を詠み込んだものである。

○五月雨の降り残してや光堂（同）

平泉の中尊寺でのこの句の初案は「五月雨や年々（としどし）降りて五百たび」で、次いで「降るも」に改め、さらに本句になった。ここで問題は、「降る」と「降り残す」の捉へ方の違ひといふことになる。「降る」はかなたのことで、客観的にも自然を詠むだけである。一方、「降り残す」は五月雨が意図的にこの光堂だけ降らなかった、といふ自然の人間的な情を看取したのである。それは同時に、五百年の風雨をしのいで今に至る光堂への讃嘆の心がある。初五と下五の、「五月雨」と「光堂」の二つに焦点を置き、中七の「降り残してや」の「や」の切字の妙を味はふべきである。かなたの光景を詠みながら、その底にあるこなたの意力に思い到ってゐる。

○有難や雪をかをらす南谷（おくのほそ道）

羽黒山神社に至る途中の南谷にはまだ雪が少し残ってゐる。暑い盛り、雪の上を通ってきたやうな心地よい風が吹いて来る。この状景を、雪を薫らせる薫風と、こなたとしての力を捉へて、清浄な霊気が身に沁みる。その気持が「有難や」に響いて、渾然となってゐる。

○春雨や蓬をのばす草の道（草之道）

単純に言へば「蓬をのばす」は蓬がのびるであり、「草の道」が蓬をのばすのであらう。しかし、ここで、こなた、かなた論から考究しなければならない。「春雨や」は「や」の切字によって全体を覆ってゐる。しとしとと降り続く春雨によって蓬は高く生長してゐる。その草の道がはるかに続く。蓬を伸ばすのは春雨であり、さらには春が蘇り、その生命の力が伸ばしていくのである。かなただけの伸びるではその勢ひがない。生命を伸ばす根源の力が、こなたへと作用するのである。さらに言へば、そのやうに春雨の現象を捉へる作者自身の心までが蓬を伸ばさうと心の内に感じてゐる。かなたの力を感じた作者自身もその目で蓬を見てゐるのであり、この句全体に優しい情が漂ふのはそのためでもある。

○まゆはきを俤にして紅粉（べに）の花（おくのほそ道）

尾花沢から立石寺への道の途中、畑に紅花が咲いてゐる。それは女性の化粧の眉掃きを思ひ浮ばせるやうである。紅花の色、形、言葉から、女性の化粧へと連想が広がっていった。それは作者の感情の動きによるが、さうは言はずに、紅花から見てそのやうにして咲いてゐると捉へた。前句のやさしさとともに、艶っぽいなまめかさを感じさせる。作者自身の主動ではなく、紅花のこなたとしての立場からそのや

うに思はせ、感じさせる。といふことは、自分に思はれ、感じられるのであり、抑制した静けさがある。

○うぐひすの笠おとしたる椿かな（猿蓑）

鶯が梅の花でなく、椿の枝に飛んで来て、枝渡りしてゐる時、たまたま椿の花が地面に落ちた。それをあたかも鶯が自らの意思で落したやうに捉へたところが着眼点で、俳諧的である。一句の題は「椿」であるが、その感興は上五中七にあり、鶯のこなたからの作用として表現するところに、この句が生き生きとして、動きが出てくる。従って、椿は既に落ちてゐたのではなく、今、落ちたとすべきである。また、「笠おつる」では平凡な風景に終ってしまふであらう。

○桟（かけはし）や命をからむつたかづら（更科紀行）

木曽街道の天下の難所に桟がかかり、そこに蔦葛が絡みついてゐる。蔦が命を絡ませてゐると、かなたのことをこなたとして捉へたところが中心である。蔦自身の命を桟に絡ませてゐると、作者は蔦の心意を把まうとした。といふことはその根本に、蔦が行く人の命を絡ませてゐる、つまり桟を渡る人の心も蔦と同じやうに危いものであると捉へる気息が漂ふ。これは客観描写ではなく、作者自身の主観的な心情を蔦に托して表したのである。

○七夕や秋をさだむる夜のはじめ（笈日記）

七夕祭を迎へ、すっかり秋らしくなった。「秋をさだむる」のは誰といふほどでもない全体者、即ち、季候、季節を司どる天であり、自然の存在である。従って、ここを仮に「秋のさだまる」と、かなたとして表すことができる。それを敢へてこなたから他動的に表現するところに、作者の趣意がある。立秋も過ぎ、七夕の夜になって冷やりとした秋気を感じ取り、いよいよ秋に入ったと心に定めたのである。このことから「秋をさだむる」主体は作者自身でもある。

○月はやし梢は雨を持ちながら（真蹟懐紙）

明け方の空に月が渡り、木の梢に雨の雫が溜ってゐる。梢が「雨を持」つと捉へたところが主眼である。もとより梢にその意図はない。しかし、雨の降った後の爽やかな朝の空気の中で、梢も生き返ったやうに新鮮、清新に輝いてゐる生命の力を感じたのである。単に擬人法と言ふだけでは足りない、こなたからの作用と読み取るべきである。

○五月雨は滝降りうづむみかさかな（曽良書留）

五月雨が降り続き、水嵩が増して、滝を埋めるほどになってゐることだらうと想像してゐる。「滝降り埋めらる」と表せばかなたにおける受動的な表現であるが、それをこなたから滝を降り埋めると捉へて、力強く表した。作者は自然現象の根底にある原力に目を注いで、表現に向はうとする。

○年々や桜をこやす花のちり（蕉翁句集草稿）

桜の花が散り、それが桜の肥やしとして、大きくさせる。「肥やす」は「肥ゆ」の未然形「こや」が情態言として、他動性の接尾辞「す」についたものである。一般的には「こやしとなり」（全集）と解するしかないが、作者の趣意から言へば、「肥ゆ」やうにさせる、桜を太らせ生長させると考へるべきである。ここでも、自然の根本にある生き抜く力をこなた側から捉へようとしてゐる。

○作りなす庭をいさむる時雨かな（真蹟懐紙）

うまく作った庭に時雨が降って来て、生気を与へ、元気づけてゐる。雨が生物に降りかかり、生き生きとした生命力を与へるといふ捉へ方である。単なる隠喩を越えた、こなたに立ち返った上での独自の発想であり、芭蕉の句風の重要な要素を占めてゐることを認識しなければならない。

②俳文

○抑事ふりにたれど松嶋は…東南より海を入れて…浙江の潮をたたふ。嶋々の数を尽して…枝葉汐風に吹きたわめて、屈曲おのづからためたるがごとし。（おくのほそ道、松島）

松島の自然の美を筆を尽して描写してゐる。「海を入れて」「数を尽して」は客観的な自然現象としては海が入り込んでゐる状態、島々が数多く点在してゐる様子である。その描写を上代のやうにそのまま目に見えるままに言ふのではなく、松島が自ら能動的に海を入れ、多くの島を点在させてゐると、自然が対象に作用し、行動してゐると捉へたのである。次の「吹きたわめて」「ためたる」も松の枝葉を吹き曲げ、枝ぶりもうまく曲げ整へてゐると捉へる。それらは実際には吹き曲げられ、曲げ整へられてゐるのに、弱い受動的な表現をせずに、ことさら力強く言はうとした。この筆法は一般的に漢文訓読調を摸したと言はれるが、今まで述べてきた芭蕉の文体の特色から言へば、かなたのことを表すのに、その根源にあるこなたの力の勢ひを感じ取って、意識して他動的に表したと解すべきである。その根本の作用と言へば、この後に出てくる「千早振る神の昔、大山祇のなせるわざ」であり「造化の天工」なのである。この神のはたらきを表面に出さず、全体者たる何かがそのやうにさせてゐるといふ認識で、意図的にこなたによる表現をしたのである。

○月、海に移りて、昼の眺めまた改む。（同）

昼に眺めた風景が夜になって変化したことを言ふ。この主体は何か。素直に文脈を辿れば月であり、月が昼の眺めを改めたと解することができる。これを、「改まる」の意味だが引締めて「改む」とした「漢文訓読語法による」と考へる説がある（大系、角川文庫）。しかし、この作品全体の表現方法からすると、これはこなたの根源から発想して、かなたの実現をめざしたもので、今までと同じく、月の光の美しさが夜の眺めを昼と違った情趣に照らし出したと解釈すべきであらう。漢文調を真似るといった外面的、技巧的、また結果的なものではない。

なほ、前項のすぐ後に、「ふすもの（島）は波にはらばふ。あるは二重にかさなり、三重に畳みて、左にわかれ、右につらなる」といふやうに、客体的なかなたの表現が続いてゐるところもあり、内容に応じて変化をつけてゐる。

○経堂は三将の像を残し、光堂は三代の棺を納め、三尊の仏を安置す。七宝散り失せて、珠の扉風に破れ、金の柱霜雪に朽ちて、既に頽廃空虚の叢となるべきを…（同、平泉）

普通の表現なら自動詞、あるいは受身の表現にするところを他動詞を使ひ、こなたから表してゐる。「残し、納め、安置す」の主体はことさら表す必要のない全体者であり、そのために自動的、受動的な表現も可能になる。これに続く文はかなたによる表現である。まづ、こ

なたで始り、かなたに変る描写であり、その逆はない。書き始めは改まって意識的に意欲を高めるのであらう。

○山上の堂に登る。岩に巌を重ねて山とし、松栢年旧り、土石老いて苔滑らかに、岩上の院々扉を閉ぢて物の音聞えず（同、立石寺）

やはり最初はこなたから叙して、かなたに及ぶ。岩の重なった峻嶮な山であることを言ふにはそのやうにならしめた根本の力から説き起す必要がある。これに続く、松栢の古さ、土や石につく苔の描写は一転してやさしく、客観的になる。作者は表現方法の使ひ分けを十分に考へてゐたのであらう。

○江山水陸の風光、数を尽して、今、象潟に方寸を責む。…山を越え、礒を伝ひ、いさごを踏みて…蜑の苫屋に膝を入れて…（同、象潟）

象潟の章の初めは前の飯塚（飯坂）と同じく、こなたによる表現を畳み込み、気分を高揚させてゐる。この後、

○桜の老い木、西行法師の記念を残す。…南に鳥海、天を支へ…西はむやむやの関、道を限り、東に堤を築きて…海、北にかまへて…寂しさに悲しびを加へて、地勢、魂を悩ますに似たり（同）

寺の方丈から東西南北の眺めを、こなたの自然の作用によりかなたが実現したとばかりに、力強く筆を進めていく。その筆力が余って、象潟の寂しく悲しい土地の有様が「魂を悩ます」と極点に到った。これらの表現は次節で述べる、かなたからこなたへの作用による、こなたの心情を表す表現に関はる。作者のこなたなる主情的な感慨が自然に及び、反射的に今度は自然が情を持つかのごとく作者にはたらきかけて感情を揺さぶるといふ構造である。

○奇石さまざまに、古松植ゑならべて、萱ぶきの小堂、岩の上に造りかけて、殊勝の土地なり。（同、那谷）

那谷寺で、古い松が並んで植わってゐて、小さいお堂が岩の上にもたれるやうに造られてゐることを、やはりこなたからの他動のはたらきを主にして描いた。そこに、寺側の主体的な努力の跡を見ることができよう。

○抑御膳の浦は、勢多、唐崎を左右のごとくし、海を抱きて、三上山に向ふ。…海は…松のひびき波をしらぶ。日枝の山・比良の高根をななめに見て、音羽・石山を肩のあたりになむ置けり。長柄の花を髪にかざして、鏡山は月をよそふ。（洒落堂記）

滋賀の膳所の浦から多方面に眺め渡した地勢を擬人表現をたくみに使ひ、人間が相対してゐるかのやうに美文調で描いてゐる。このやうに、芭蕉は事改めて風景の美を書き起さうとする時に、気合を入れ、構へて、こなたから見て、そのこなたの妙なる作用を主にして、かなたの風景を総括的に展開していく叙法を使ふことが多い。従来の、漢文訓読調によるとか、他動詞を自動詞的に使ったとかいふ解釈は一面的な考へ方である。

○よもぎ、根笹軒を囲み、屋根もり壁落ちて、狐狸ふしどを得たり。…南薫峰よりおろし、北風海を浸して涼し。日枝の山、比良の高根より、辛崎の松は霞こめて…（幻住庵記。猿蓑）

北風、海を浸すといふことを裏から言へば、海が、北風によって浸されるといふことである。こなたよりかなたへの作用を表すことは、かなたがこなたの作用を受けることになる。他動と受動のどちらに視

点を置いて、焦点を定めるかといふのが、こなた、かなた論の中心である。自動詞、他動詞論とは違った観点から文法的に解釈しようといふのが本稿の立場なのである。ここでも事改めて、こなたの他動表現を重ねて力を込めてゐる。

○（邸宅の）地は山の頂きに支へて、亭は東南を向ひて立てり、奇峰乱山かたちをあらそひ…美景たくみを尽す。造化の功の大いなること、また楽しからずや（秋鴉主人の佳景に対す。曽良書留）

前項と同じ筆法で、松島の描写にも通ってゐる。「支へて」は、「箱根八里」（鳥居忱）の「万丈の山　千仞の谷　前に聳へ後に支ふ」の「支ふ」と相似てゐる。「東南を向ひて」は「東南に向ひて」「東南を向いて」と比べて、主人の趣向を強く示す。また、ここで、「造化の功」と言ってゐることに注意すべきで、松島の条の「造化の天工」と同じ意味である。上来、説明してきたこなたの根源に立ってかなたに及ぶ発想は「造化の天工、功」の作用と芭蕉が認識してゐたことがこれによって確認できる。

（2）人との関はり

○蔦植ゑて竹四五本のあらしかな（野ざらし紀行）

「閑人の茅舎をとひて」と前書があるやうに、蔦を這ひかからせ、四五本の竹が風に揺れてゐる主人の風雅な心を讃へる。ここで、「蔦植ゑて」は主人の動作で、そのこなたの立場に立って表現してゐる。従って、「蔦を植ゑてあって」と考へるべきであり。「蔦が植ゑてあって」とかなたに傾いた解釈（大系）は不十分である。とは云へ、ここの主体は個人を超えて全体者でもよく、「蔦が植わってゐて」と自動詞的な状態を表すと解してよい。つまり、こなた性はそれほど強くなく、かなたの状態になりつつある。

○芋植ゑて門は葎の若葉かな（笈日記）

句会が開かれた草庵の、畑には芋を植ゑてあり、門には葎の若葉が繁ってゐる。この「芋植ゑて」も前句と同じく、「芋を植ゑてあって」と解すべく、「芋が」と解する（全集）のは現代的な捉へ方である。ここはやはり庵の主人の風雅な心をこなたとして主人の意趣に沿って捉へてゐる。前稿で触れたやうに「月入れたる槙の戸口、けしきばかり押しあけたり」（源氏物語、明石）の「入れたる」「押しあけたり」の主体の強い意図を読み込まなければならない。ただ、この二句はそれほど強いものでなく、「芋を植ゑてあり」の「てあり」のやうに、さういふ状態をやや客観的に表してゐる。この「て」を文法的に説明すると、「時間的あるいは論理的順序や、結果が状態として下句を修飾する状態修飾の意が強い」（小学館古語大辞典）といふことになる。なほ、「ばせを植ゑてまづにくむ荻の二葉かな」（続深川集）は、芭蕉を植ゑ、その近くに風を待つ荻の双葉が出始めた、その生長に風が気になることを詠む。ここの「植ゑて」は、ただ、こなたとして表してゐて、その世界に止ってゐる。前句で、こなたからかなたへと視点の移動を示してゐるのは後句と比較すれば理解されよう。

○田一枚植ゑて立ち去る柳かな（おくのほそ道）

この句の主語について諸説がある。簡潔に要約すると、植ゑるのは早乙女か作者が幻想の中でか、立去るのは早乙女か作者か、また、植ゑて立ち去ったのは柳の精霊か柳になりきった作者かなど論議が絶え

ない。ここはあまり複雑化して難しく考へる必要はなく、前の二句の「植ゑて」と同じやうに解釈していいのではないか。既に指摘されてゐるやうに、西行は当地に来て「道の辺に清水流るる柳蔭しばしとてこそ立ちどまりつれ」（新古今集、二六二）と詠んだ。これに倣って芭蕉も「けふ此柳のかげにこそ立ち寄」った。早乙女が一枚の田を植ゑてあって、植ゑ終ってゐて、と前述の「て」の通り「自動詞的な状態」を意味する。つまり早乙女のこなたとしての動作は全体者に転じて、かなたの状態になり、そこで、作者も「立ちどまる」「立ち寄る」から次の「立ち去る」への行動に移ったのである。なほ、前二句では中七、下五が周囲の状景を詠み、初五の「植ゑて」の主体との文脈の流れは自然である。一方、この句は初五と中七の主語が転換してゐることで、やや理解しにくくなったのであらう。しかし、芭蕉の句が「て」の「上下で主格が転換する」（全集）ことはよくある（後述）。この句の解釈の主眼は前述の接続助詞「て」の本義であり、こなた、かなたの視点の移動なのである。

○人に家を買はせて我は年忘れ（猿蓑）

弟子の新しい家で忘年会を開き、新年を迎へることができることを冗談めかして詠んだ。家を新しく購入したのは弟子であるが、まるで自分が弟子に買はせた、買ってもらったやうな気分で、満足してゐる。こちらが買はせたやうな形になって、実際はあちらが買って、かなたが実現したのである。門下生だからこそかういふ言ひ方ができ、親しみを感じてゐるのである。

○清滝の水汲ませてやところてん（泊船集）

中七が「汲みよせて」とするのもある（笈日記）。水を汲んでところてんを冷やしたのは主人であるが、作者はその感謝のあまり、自ら水を汲むやうにさせたと、そのもてなしを喜んでをり、前句と構造は同じである。この種の表現は前稿に述べたやうに現代でも「子供を死なせた」と悲しむ親の表現にまで続く、日本人の根本的な発想である。

○春雨や簑吹きかへす川柳（裸麦）

「簑吹きかへす」のは風か柳か、難解な句である。文構造から言へば柳であるが、風が柳を吹きかへし、その柳によって簑があふられてゐるとするのが穏当な説である。風、柳が簑の人に吹くことによって、簑が裏にかへされるといふことで、やはりこなたの力が及んで、かなたの状態的な描写になってゐることがわかればよい。

○さみだれの空吹き落せ大井川（有磯海）

大井川が増水し、島田宿で留められた。「吹き落せ」の呼びかけが川へか、風へか説があり、また、大井川に吹き落せとする解釈もある。先述の「暑き日を海に入れたり最上川」を参考にすると、大井川の急激な流れの力で梅雨空を吹き落せと呼びかけたと取れる。一方、前項の句から言へば、風が川の流れをより強くさせる、また、川が風の力を借りてとも考へられる。いづれにしても中心は大井川の激しい流れであり、「豪快な感じの句」（頴原退蔵『俳句評釋』）である。風の強さは当然のことなので、大井川の迫力ある力をこなたから捉へて、呼びかけたと解するのがよいであらう。

○夜着（よぎ）ひとつ祈り出だして旅寝かな（真蹟懐紙）

冬に三河の鳳来寺に参詣する途次、麓の宿坊に泊った時、夜具を出

してもらひ、もてなしを受けた。夜具を揃へたのは庵主であるが、その親切さに、本尊の薬師如来に祈り、その法力で出てきたほどと機智をきかせて挨拶句とした。こなたの念の作用がその通り実現したのである。なほ、この前書に「一とせ芭蕉此山にのぼりて日をくれ…」とある。この「日をくれ」は「日が暮れて」（芭蕉全句集）といふ意味であるが、一般的な言ひ方でない。「煙立つ春の日暮（ひぐらし）」（万葉集、三三二四）の「日暮らし」は日を暮らすといふ状態でといふ意味で、一日中のことである。「日を暮る」は日を暮らすが本義で、このこなたによる表現がかなたに転じて、日が暮れるといふ状態的な意味になったのであらうか。つまり、日を暮れさせることは日が暮れることになるわけである。

○たふとがる涙や染めて散る紅葉（笈日記）

寺の境内の色づいた紅葉が散るさまを、信者の一途な信仰心が涙になって葉を赤く染めたのだらうかと感じ取る。事実は自然現象であっても衆生の信仰の赤き真心が赤く染めたと、信仰の深さを讃へた。「たふとがる」は「たふとむ」でも「たふとかる」（形容詞）でもない。「がる」はそのやうに行為する、態度にさせるといふ意味で、積極性がある。ここに、こなたとしての強い信仰の力がある。単なる比喩表現でなく、人の心がそのやうに実現させる力があると、こなたとしての作用の強さを詠んだのである。なほ、「涙や染めて」を対格に取り、「有難さにこぼす涙を：紅葉があかく染める」と解する説がある（大系、芭蕉句集）。この場合、紅葉にこなたの作用を見ることになるが、「たふとがる涙」を初めに置いて、これを主題にしての感動であるので、前者の解が適切であらう。

○花みな枯れて哀れをこぼす草の種（ひとつ松）

八重葎が枯れ、その種が地にこぼれてゐるさまである。種をこぼすのは草であり、それがまるで哀れそのものをこぼしてゐるやうに感じた。実際は種がこぼれるのであるが、あたかも草自身の意志で種をこぼしたやうだと、よけいに哀れさが身に沁みる。草にその力を感じ取り、擬人的に表現し、その健気さ、はかなさを見て取ったのである。植物の自然の相がそれを見る人間に関はって感慨を催させる。それはひとへに「哀れをこぼす」と、こなたの意識として捉へた志向にもとづくのである。

○秋の夜を打崩したる咄かな（笈日記）

「雨もそぼ降りて静なれば」と前書がある。静寂な秋の夜、その暗い雰囲気を払ひのけるやうに、人々が明るく楽しさうに語り合ってゐる。「秋の夜の打崩さるる」ではかなたの表現で、一座の人々の熱気が感じられない。ここは人々の熱く和やかな心が部屋に満ちて、秋の夜を明るくにぎやかにした。それを「打崩したる」と力強く表現し、こなたによる作用によって、かなたに実現した一座の雰囲気を伝へようとしたのである。

（三）「かなた」から「こなた」へ

（1）自然現象との関はり

○山も庭も動き入るるや夏座敷（ゆきまるげ）

「動き入るるや」の主体は「山、庭」である。初五が「山も庭に」（曽

良書留）といふ形もあり、その場合は「山」が主体となる。山も庭もかなたから夏座敷に迫り、入って来るほどの夏の力強い生命力の溢れた自然の勢ひを感じてゐる。これが、かなたからの作用がこなたにはたらき、こなたの世界に実現するといふ発想なのである。この発句は先述の「秋鴉主人の佳景に対す」にあり、こなたからかなたへの発想で「造化の功」を強い筆勢で叙してゐる。両者相俟って、大自然に籠り蓄へられた活力を読み取るべきである。ただ、この表現は「堂の前に立てたれば、山もさらに堂の前に動き出でたるやうになむ見えける…〈歌〉山のみな移りてけふにあふことは…」（伊勢物語、七十七）に拠るといふ説もあり、芭蕉独自のものではない。また、「中七字文法上ねぢれてゐるが…或は『動き入る也』かも知れず」（幸田露伴『続々芭蕉俳句研究』）と考へ、動き入るといふ他動詞でなく、動き入るといふ自動詞と解する説もある。しかし、芭蕉に限らず、こなた、かなたの発想による表現を追究すればこの種の表現は国語らしい語法として定着してゐる。芭蕉は決して破格の文法により表現しようとしたのではない。

○清滝や波に散り込む青松葉（芭蕉翁追善之日記）

青い松葉が清滝の川波に散り込んでゐる風景であるが、夏に松葉が落ちることはないので、実景でなく、「川の清涼感を盛り込もうとした主観句」で「作者の心象風景」（全集）とする説が穏当である。生命感の満ちた常緑の松葉の凜々しさ、鋭さの内に込めた力の発露をかなたからこなたへ、それはまた自分自身へと感じ取ったのであらう。この句は「清滝や浪に塵なき夏の月」が「しら菊の目にたてて見る塵もなし」と紛らはしいとして、臨終三日前に改作したとされてゐる。そこに何か意味を読み取らうとしたのが、右の私案である。

○四方（しほう）より花吹き入れてにほの波（白馬）

洒落堂から琵琶湖を望むと、桜が満開で、花びらが湖に吹き入れてゐる。「吹き入りて」ではこなたの表現で、狭く小さい。それを「吹き入れて」と桜自身の精霊がかなたから花びらを散らしめてゐるかのごとく捉へて、そこに生命の強い息吹を感じ取ったのである。広く、大きく、はなやかな美しさが漂ふ。

○咲き乱す桃の中より初桜（芳里（はり）袋）

「咲き乱す」は普通なら「咲き乱るる」であるが、その桃の中に混って、初桜が咲き出してゐる。「咲き乱す」は何かがそのやうにさせるのである。そのかなたからの作用は桃の中に存在してゐる生命体であらう。その力強さをこのやうに表したのであり、「咲き乱るる」は単にかなたの静態的な描写で終ってしまふ。泊船集に「『いづれの集か、咲みだすとありぬ』と注記し、上五を『最中の』の形で提出」（全集）とあるのは、「咲き乱す」の表現意図が分りにくくなったからであらうか。現代語で言ひ表すのは難しく、今を盛りと「咲きほこる」（同）が適当であらう。

○六月（ろくぐわつ）や峯に雲置くあらし山（句兄弟）

峰の上に雲が置いてゐる、つまり、嵐山の上に雲が位置を占めて立ってゐる風景である。白い入道雲がむくむくと空に伸び、山の上に重くかぶさってゐる力強さがよく出てゐる。それはまさに雲が自らの身をそのやうにさせてゐると、人間と同じやうな有意志を感じ取った

からである。

○名月や門に指し来る潮頭（三日月日記）

草庵に満ち潮が寄せて来て、その波頭が折からの満月の光に輝いてゐる。「指し来る」は波がこちらに寄せて来ることである。かなたからの自然の作用がこなたに及ぶ。その他動性表現から、生き生きした力強い満潮のうねりが躍動してゐる。

○闇の夜や巣をまどはしてなく千鳥（猿蓑）

前稿で取り上げた「初霜の置きまどはせる白菊の花」（古今集、二七七）「宿まどはして嘆く旅人」（宇津保物語、俊蔭）と同じ発想による表現である。暗い夜に千鳥がしきりに鳴いてゐるのは巣を見失って迷ってゐるのかと想像する。「巣をまどはして」とは巣がどこにあるか分らなくさせて、巣の存在を見失はせて、といふ意味で、かなたの何らかの作用によりそのやうにさせたといふ考へ方である。文法的に言へば、他動的表現が自動的表現に転じたのであり、こなた、かなた論で言へば、かなたの作用により、こなたに実現させられたといふことである。「夕されば佐保の河原の河霧に友まどはせる千鳥しば鳴く」（拾遺集、巻四）と同じ発想で、これは友を見失はせた、友をはぐらせてしまったと見て、転じて、友を見失った、友とはぐれてしまった、といふ捉へ方になったのである。前者はかなたが主、後者はこなたが主と、観点の置き方の相違による。

○荒海や佐渡に横たふ天の河（おくのほそ道）

この「横たふ」について諸説あり、「横たはる」と自動詞ととるか、「横たへる」と他動詞ととるかである。前者は「横たふ」は文法的には「横たはる」であるべきと認めながら、1、「横たふ」を自動詞に使った例がこの時代にあり、他動詞の自動詞的な用法である。2、語調を重んじ、「横たふ」と引締めて、力強さを出さうとした。3、漢文訓読の影響で、「状態を表わす語で表現すべきところを作用語によむ」（大系、芭蕉文集）、といふのが根拠になってゐる。現在、これが通説であるが、後者の他動詞説の代表は次の森重敏説である。「主語に対する客語が、主語自身である場合」、「個別者から全体者へという主語の転換が行なわれており、かつ、それと主語の消去が同時的である」。「天の川がおのれ自身を横たえる。」といふ意味で、主語の意志的な動作が主語の自発的な作用に転換し、それだけその主述関係による文の意味内容が、話手の主観とは距離のある客観的意味をもつ表現となる」（日本文法通論）。

では、本稿のこなた、かなた論を森重説を援用しながら説明しよう。荒海のたける遠くに天の川が佐渡が島にかけて大きく横たはってゐる。これは客観的で、かなたの風景である。作者はこの雄大、雄勁な天の川に大いなる意志を感じ取り、その力強い力が自らを佐渡が島にかけてゐると捉へた。かなたの根本にある自然の活力が発動し、こなた自身の作用として実現した。これは今まで述べてきた、かなたからこなたへのはたらきと変ることのない構造である。「天の川がおのれ自身を横たへ」、その結果、「横たはってゐる」のである。この際、誰が横たへたかといふ「個別者」の主語は「消去」され、「全体者」たる自然の動きが横たへてゐることになる。そして、「全体者」であるために、もはや問題にするほどもなく、「客観的」、一般的な表現に

なってゐるのである。このやうに解釈することにより、先に述べた自動詞説の三つの論点はこなた、かなた論に吸収されることにならう。

○ほととぎす声や横たふ水の上（藤の実）

ほととぎすの鳴き声が、去って行った後も、水の上に「横たふ」やうである。この「横たふ」も前句と同じく論議があり、「水の上に、ひろがり、たゆたって、声が横たわっているようだ」（全集）とするのが通説である。しかし、この句もやはり先と同じく、かなたからこなたへの作用と見るべきである。ほととぎすが飛び去った後も水の上に声を横たへてゐるほどに、その声は迫力が籠り、激しい。せわしなく鳴く声に「ひろがり、たゆたって」ゐる感じはないであらう。なほ、この句とは別に「一声の江に横たふやほととぎす」といふ別案もあるが、この句の方が「一声」の力強さがかなたからの方向に適ひ、よりふさはしいと思はれる。

（2）人との関はり

①発句

○笠もなき我をしぐるるかこは何と（あつめ句）

○人々をしぐれよやどは寒くとも（蕉翁全伝）

○草枕犬もしぐるるか夜の声（野ざらし紀行）

第一句は「みちのほとりにてしぐれにあひて」と前書があるやうに、笠も持ってゐない自分に急に時雨が降ってきた。第二句は句会の途中に時雨が降って来て寒くなったが、集まってきた人々のために風趣を高めてほしいと願ふ。ここで、本来は「に」を使ふところに「を」で表してゐる。「を」は直接的に対象を指す助詞で、その強さのため、もともと下二段活用の自動詞である「しぐる」が下二段活用の本来の使役性から「しぐらす」ともいふべく、他動詞的に用ゐられてゐる。このことは前述の「海浜にさすらへて」でも見られたものである。天からの時雨が人に及び、そのかなたからの作用が「我、人々」に迫ってくる。その強さを余裕を持って受止め、むしろそれを楽しんでゐるかのやうに思へる。この「を」について、「もとより『を』のしわざではなくて、『時雨る』といふ動詞の特別の用法によるもの」（山田孝雄『俳諧文法概論』）といふ考へ方は右のことを指すのであらう。第三句の「犬も」は「犬にも」ではなく、「犬をも」と考へ、自分だけでなく犬をもしぐらせてゐると解するのが正しい。

○雲をりをり人をやすむる月見かな（春の日）

雲が時々、月を隠し、月見客に見るのを止めさせ、一息つかさせてゐるといふ趣向である。月が雲に隠れるのを雲が人を休めることになると捉へたところが俳諧的である。現実は雲にそのやうな目的はないが、雲を擬人的に扱ひ、まるでかなたの雲の力がこなたの人に対して向って来るやうだと、雲のはたらきをおもしろく感じ取らうとしてゐる。

②俳文

○酒田の余波、日を重ねて、北陸道の雲に望む。遥々のおもひ胸をいたましめて…歩行を改めて…暑湿の労に神をなやまし…（おくのほそ道、越後路）

この「遥々のおもひ胸をいたましめて」は先に述べたやうに、かなたから重たく思ひが胸に至って苦しめるのである。かなたからのもの

をこなたとして胸に厳しく受止めてゐる。次の、「神をなやまし」は、自分の意志で心を苦しめるのではない。何かが作用して悩ませるのである。ここでは「を」を重ねて、身に迫る力を畳み込んで書いてゐる。このころ作者は「病ひおこりて事をしるさず」と書き、省筆もしてゐる。この文脈に合ふやうに、かなたからこなたへの強さを表現しようとしたのである。

○旅懐心をいたましむ。秋の空いくかに成りぬともおぼえず、（「あかあかと」前書、蕉翁句集）

「旅懐心をいたましむ」は前項と同じ構造で、一体に芭蕉にこの種の表現が多いことに改めて気づく。暑い秋の一日で、日付もわからないほどである。短文ながら苦しい旅であることを示してゐる。

（四）「こなた」「かなた」の観点の転換

前稿では「こなた」「かなた」の総合的表現としたが、発句の短詩形でその表現はあまり見られず、本稿はこれを含めて、両者の観点が一句の中で転換し、また一体化するといふ点についても考察する。

○一日（ひとひ）〳〵麦あからみて啼く雲雀（ひばり）（嵯峨日記）

○麦の穂や泪に染めて啼く雲雀（蕉翁句集草稿）

第二句が初案で、麦の穂が熟れてきて青から赤に色が変ってきたが、雲雀が涙で染めるかのやうに啼いてゐる。泪に染めるのは雲雀であり、そのこなたからの強い意志と捉へた主観的な志向である。それに対して、第一句は麦が赤らむ状態でと、雲雀と麦を切離して、主語を転換させてゐる。かなたの風景を客観的に描き、「一日〳〵」が響き合って時が過ぎ、季が変りゆくのを雲雀が悲しんでゐることを暗示する。

○木枯に岩吹きとがる杉間かな（笈日記）

鳳来寺に参詣した時の作である。「岩吹きとがる」が独特で、まさにこの時に限った一回的な表現である。「とがる」とは、とぐことによってとがった状態になる、とぐことは対象から見ればとがされ、とがることになる。前稿で述べたやうに、行為の結果によって、ある状態になるといふ、いはゆる中相（中動態、中間態）である。岩はかなたからの木枯が吹くことを受けて、つまり吹かされ、吹かれ、その結果、とがらされた、つまりとがった結果になる、その相を一語によって表したのである。初五を仮に「木枯が」とすれば「岩吹きとがす」にならう。しかし、これでは単線的なこなたの表現で、分りやすいがおもしろみがなく、しかも、「木枯」が中心になる。ここの主体は「岩」であり、そのために「木枯に」、木枯によってと受動的な意味合ひを出し、「吹きとがる」と能動と受動、他動と自動の中間的な表現になったのであらう。従来この語法について、「『岩吹きとがる』に妙味がある。文法的には『吹かれとがる』であるべきで、『吹きとがる』は自他混同の難があるが、この場合勿論許容されねばならない」（頴原退蔵『芭蕉俳句新講』）と考へられてゐた。「自他混同」は批評する時によく言はれるが、それを自他融合、自他の総合表現と捉へ直して解釈すべきである。

○病雁（やむかり）の夜さむに落ちて旅寝かな（猿蓑）

前書に「堅田にて」とあり、「堅田の落雁」をきかせ、作者は病中

であった。「病雁」をびょうがんと音読する説もある。この句は通説では、中七で切れるとして、雁が急に地に降りてきた、自分もその雁と同じやうに旅寝をしてゐると、主語が転換して、作者は雁に自分の姿を感じ取ってゐるとする。確かにそのやうに解すると、芭蕉のわびしい気分にふさはしく、味はひ深い。しかし、一方、雁が旅寝をしてゐると主語を変へずに解する説もある。

そこで、この句をこなた、かなた論で考へると、次の通りになる。「病雁の夜さむに落ちて」は作者の想像であり、かなたの世界である。「病雁」であらうと思ひめぐらし、そのまま地に臥してゐるであらうさまを「旅寝かな」と客観的に捉へた。「かな」は「かも」が内向的であるのに対し、外向的とされ（日本文法大辞典）、また、「淡々として傍観者的」で、「治定、大断定」するものである（山本健吉『俳句私見』）。ここでは、かなたにある「病雁」への感動、詠嘆である。そして、この句全体が自分自身に振りかかり、投影され、身に沁みて感じ入ってゐるのである。中七で共感したのではなく下五まで至り、幻視した雁全体の姿がこなたなる自分自身に一体化し、かなたからこなたへ転換したのである。

○芋洗ふ女西行ならば歌よまん（野ざらし紀行）

伊勢路を旅した芭蕉は神路山の南方にあって西行隠栖の跡といはれる西行谷を訪ねる。前書に「西行谷の麓に流れあり。女どもの芋あらふを見るに」とあり、この句を詠んだ。ここは前後の文脈がなく、主語の取り方によって解釈に次の通り諸説がある。1、芋洗ふ女に、イ、西行であるなら（大系・句集）、ロ、私が西行ならば（同・文集）2、芋洗ふ女よ、私が西行ならば（全集）。1説は「芋洗ふ女」を動作が対象に及ぶ与格と考へる。しかし、前書に「女どもの、芋洗ふを見るに」と言っておいて、初五で対象を繰返す必要があらうか。このイ説は西行だったらその西行が詠むだらうと、かなたに置いてひとごとのやうに扱ふ。ロ説は私が西行だったらその私がと、こなたから捉へてゐるが、私が詠まうではやはり意志としては弱い。2説は「芋洗ふ女」よと、呼格に置いてゐるが、呼びかけるほどのものではなく、それにしては「（我）詠まん」が弱い。「ん」は意志を表すのだらうか。

さて、発句の構造について森重敏は次の通り述べる（日本文法の諸問題）。「『古池や』と全体的な情景を詠歎し、その情景のなかにおいてその情景を主語とする本質的な述語『かはづとびこむ水の音』を情景に内属的なものとして見出しつつ捉えるのが発句の基本である」。そして、この「や」は「は」と同じく係助詞としてのはたらきをすると言ふ。これをもとにして考察すると、発句が初句で切れる場合、それは主体たる主語、主格の位置に定められる。この句では、「芋洗ふ女は」として、主題として提示される。あるいは「芋洗ふ女や」と切字にしてもよく、この句の主人公を女とするのである。次に、この初五が「西行ならば歌よまむ」といふ述部全体に係っていく。従って、「歌よまむ」の主語は「芋洗ふ女」である。「芋洗ふ女」は、相手が「西行ならば」、きっと歌を詠むであらう、しかし、私のやうな相手なら不足であり、残念ながら詠むことはないだらうと解釈したらどうか。「詠まむ」の「む」は意志でなく、推量である。

この句はややおどけながら、西行を尊ぶ気持が込められてゐる。全

体としてかなたのものとして捉へながら、自分自身に振り返って、こなたにも向けられてゐる。この解釈は西行が江口の君と歌を贈答した説話と決して矛盾しない。この場合はあくまで故事の通り、女と西行との発句のやりとりを想定して言ってゐるのであり、自分がといふこなた性はもとよりない。なほ、この解釈と同じ読み方があり、「もし私（芭蕉）が西行だったら、芋洗う女は私へむけて歌を詠んだろうに」とする（嵐山光三郎『芭蕉の誘惑』）。「私へむけて」が、かなたからこなたへの作用をよくきかせてゐる。これに続いて「其日（そのひ）のかへさ、ある茶屋に立寄りけるに、てふと云ける女、『あが名に発句せよ』と云て」、芭蕉は句を「書付け侍る」。これも右の故事にならったもので、今度は芭蕉が句を与へることになった。両者相俟って、西行を意識した旅であった。

○若葉して御目の雫ぬぐはばや（笈の小文）

奈良の唐招提寺の開山堂に安置されてゐる鑑真和上の盲目の尊像を拝した時の作である。この句に二つの説があり、初五の「若葉して」をどう解釈するかによって決る。それは、「して」を格助詞とし、「若葉で、若葉をもって」、一方、「し」を動詞とし、「あたりは若葉して、若葉したたり」とするかの違ひによる。前者が通説で、その論拠は、「して」を手段、方法に使ふ用例が芭蕉に「松の炭して書き付けはべり」（おくのほそ道、雲巌寺）とあること（ただし、引用であることに注意）、後者なら主語が若葉から作者へと転換して不自然なことの二点である。

では、後者の論拠を簡潔に述べ、併せて、かなた、こなた論によって説明を加へていく。

1、別案に初五が「青葉して」とある（笈日記）。「青葉して」なら青葉になって、青葉したたりと自然に意味はとれるが、「青葉でもって」なら、ちぎった葉を青葉といふ表現があるかどうか。

2、若葉で顔の涙を拭ふことが現実に可能かどうか。直接的で俗的、即物的で、文学的な表現として成り立つかどうか。

3、若葉でもってであれば、一句の流れが一直線で平板、単調である。そこに文学的な感動があるかどうか。

4、境内全体が若葉したたり、まばゆいばかりである。その感動のまま尊像に対面した。堂の中も尊像も今歩いてきた若葉の新鮮な気に満ち、その新緑のしたたりを尊像に拝したのである。

5、これを構造的に言へば、初句の「若葉して」が主題として全体的に提示され、その内実の述部が「御目の雫ぬぐはばや」である。「若葉して」はいはば「若葉してや」「若葉すや」と同じく、切字のはたらきをしてゐる。この句を朗読する時、「若葉して」で小休止を置き、次に中七下五を一息に読むのが自然である。俳諧における「て」には独特の用法がある。

6、これを二句一章論（大須賀乙字）で解釈することもできる。初五は現実の風景であるが「一種の象徴」として用ゐられ、中七下五の心の中の思ひと対立、止揚されて、「統一的情趣」に総合、統合されるのである。

7、芭蕉以後に「若葉して」を動詞の意に用ゐる例が次の通り見られることは、当代にそのやうに解してゐたこと、芭蕉がその季題を新

しく創造して受継がれたと考へられる。

若葉して水白く麦黄ばみたり　与謝蕪村
若葉して仏のお顔かくれけり　夏目成美
若葉して男日照りの在所かな　小林一茶
若葉して家ありしとも見えぬかな　正岡子規
若葉して手のひらほどの山の寺　夏目漱石
若葉して籠り勝なる書斎かな　同

8、以上を踏まへて、こなた、かなた論で考察する。若葉をもってと解するとこなたによる発想で、わがことだけで終る。これでは一本調子で散文的、句としての広がり、深まりがない。「若葉したたり」と解することによって、まづ、かなたの世界が全体的な情景として示される。次に、そのかなたが作者の心の中に入り、映ずることによって、こなたとして捉へられる。若葉のしたたりが尊像の目に涙の「雫」のやうに溜ってゐる。それは現実を超えた幻想、幻視の世界、心の内なる世界であり、わがことの行動となっていく。このやうにかなたがこなたに転じることにより、両者が一体化したのである。

最後に、芭蕉の句風としばしば対照される蕪村の発句は本稿の主題ではないが、試みに芭蕉の句を念頭に置いて作ったとされるものをいくつか並べて考察し、簡潔に述べる。

○さみだれを集めて早し最上川　芭蕉
荒海や佐渡に横たふ天の川　同
さみだれや大河を前に家二軒　蕪村
○春雨や蓬をのばす春の道　芭蕉
春雨や小磯の小貝ぬるるほど　蕪村
○若葉して御目の雫ぬぐはばや　芭蕉
不二ひとつうづみ残して若葉かな　蕪村
絶頂の城たのもしき若葉かな　同
○白露もこぼさぬ萩のうねりかな　芭蕉
白露や茨（いばら）の刺（はり）にひとつづつ　蕪村
○ゆく春を近江の人と惜しみける　芭蕉
ゆく春や逡巡として遅ざくら　蕪村

僅かな例句であるが、これらを通観して次のことが分る。芭蕉は内面的で、主観的に人生や自然を深く掘り下げ、また両者の関はりを探らうとする。一方、蕪村は外面的で自然を客観的に観察し、内面にまで入らない。写実的で絵画的に詠まうとする。これをこなた、かなた論で言へば、芭蕉はこなたから、かなたからの作用の方向、また両者の関り合ひによる総合的な捉へ方をする。一方、蕪村はほとんどがかなたの世界を表し、かなたとこなたとの関係については注意を払はない。このことから芭蕉の句をこなた、かなたの観点から読み直すことに意義があるのである。

短詩形で、音数の制約もある発句をこなた、かなたの観点で解釈するのは前稿の歌や文章と比べて、かなりの困難がある。五七五の句で言葉を極限まで削り、言葉足らず、連想が飛躍し、文脈もつかみにくく、解釈がいろいろにできるのもあった。しかし、全体として、芭蕉の句をこのやうに分析して読解することにより、作者の趣意、心意、

意図がよりはっきりと理解でき、鑑賞することができる。こなた、かなたの重点の置き方、相関関係は日本人の伝統的な言語表現の根底を成してゐるのである。

Interpretative Grammer by Viewpoints of *Konata* and *Kanata*

—Part 2—

Isao WAKAI

Abstract

7. supplement to part 1
8. interpretation on haiku and sentence by *Basho*
   (1) *konata* (this place , subjectivity) or *kanata* (opposite side , objectivity)
   (2) transition from *konata* to *kanata*
      1. relation with a natural phenomenon
      2. relation with humans
   (3) transition from *kanata* to *konata*
      1. relation with a natural phenomenon
      2. relation with humans
   (4) conversion of viewpoints on *konata* and *kanata*

Keywords: intransitive verb, transitive verb, *konata*, *kanata*, *Basho*